

だざいのそち

「大宰帥大伴旅人・送別の歌」

大宰帥大伴郷（旅人）、大納言に任せられ、京に入らむとする時に、府の官人ら、郷を筑前国の蘆城の駅家に餞する歌四首

さきみ

ありそ

いほへなみ

1) み崎廻の 荒磯に寄する 五百重波

立ちても居ても 我が思へる君

巻四―568

右の一首は筑前掾門部連石足。

（解説）「岬の湾曲した所」。そこに寄せてくる波が幾重にも重なって立つように、立っていても坐っていても、いつも思いを去らぬ君です。と大伴旅人への真情を吐露して詠んだ一首であるといわれる。

* 「み崎廻り」―岬の湾曲した所。

* 「五百重波」―幾重にも重なって打ち寄せる波。

からびと

ころもそ

むらさき

2) 韓人の 衣染むといふ 紫の 心

し

に染みて 思ほゆるかも

巻四―569

（解説）韓国（からひと）の人が衣を染める紫の色が染みつくように、紫の衣を召した君（大伴旅人）のお姿が私の心にしみついて思われてなりません。

*「韓人」は朝鮮や中国の人。 当時、先進文化の担い手であった。ここでは染色技術の優秀さを讃える意味をもつとの説がある。

*「紫の衣」―勤務服の色を指す。

・当時の大宰府政庁に勤める役人は、その役職によって朝服ちやうふく（日常勤務服）の色がきまっていた。

・「紫色の朝服」は大宰帥（長官）の服の色であった。

やまと

3) 大和へ 君が発つ日の 近づけば

た

とよ

野に立つ鹿も 響めてぞ鳴く

巻四―570

*右の二首（巻四―569、570）はだいてんあさだのむらじやす大典麻田連陽春。

（解説）大和に向けて君が発せられる日が近づいたので、心細いのか野に立つ鹿までがあたりを響かせるほど泣き叫んでいます。

つきよ

4) 月夜よし 川の音清し いづこかに

おと

行くも行かぬも 遊びて行かむ

巻四―571

*右の一首はかきもりのおおともよつな防人佑大伴四綱。

（解説）月夜もよいし川の音も清らかだ。さあ、ここで、都へ行く人も残る人も、遊んで帰ることにしましょう。

① 右記の4首の歌は大宰帥（太宰府の長官）大伴旅人が天平二年（730）十一月に大納言に任じられ、十二月、京に向けて旅立つに際して大宰府の官人たちが筑前の国・蘆城の駅家で送別の宴を張った。その時に配下の官人たちが詠んだ送別の歌である。

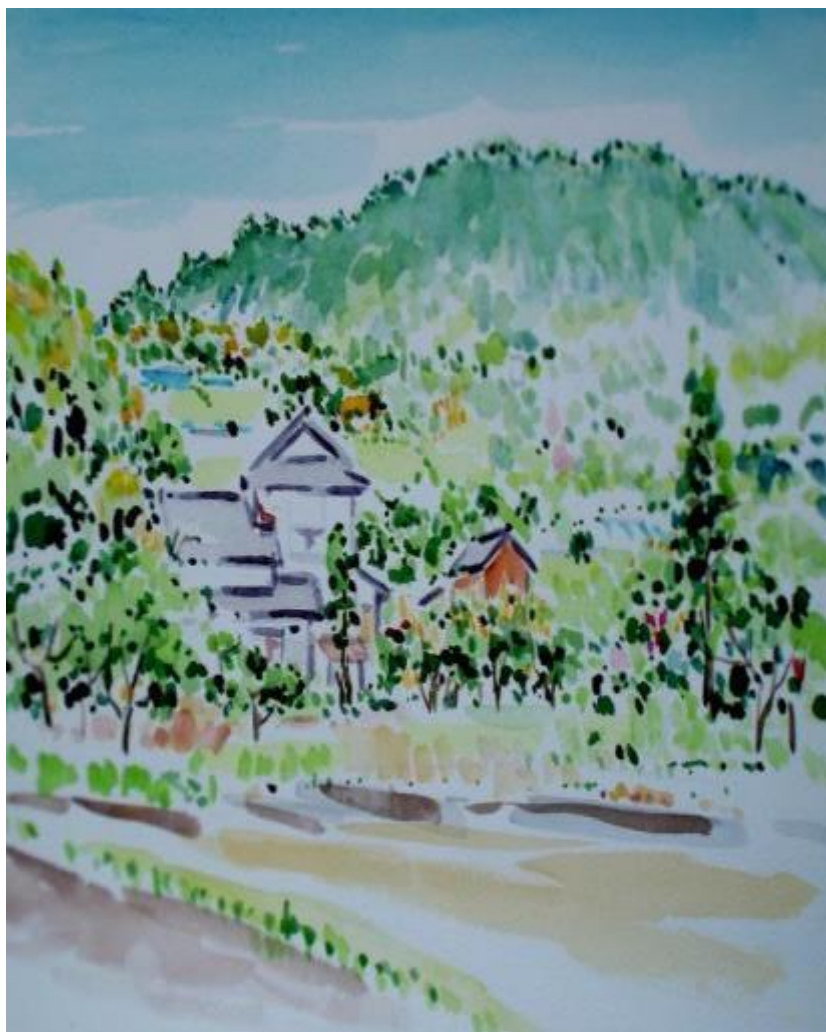
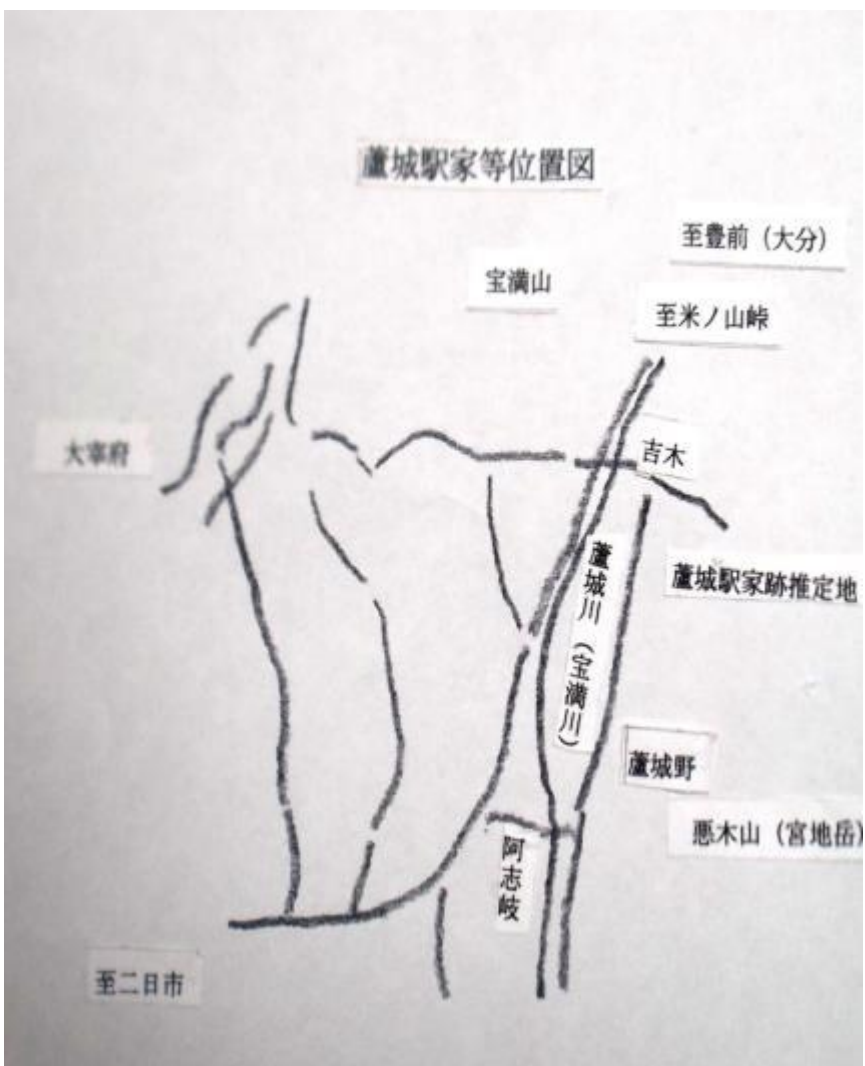
② 旅人の送別の宴が張られた「蘆城の駅家」は昭和五十三年（1978）に大宰府政庁跡（福岡県太宰府市）から東南へ約4km離れた福岡県筑紫野市大字吉木の水田下から奈良時代〜平安時代のもつとされる建物跡が発掘されたが、この建物群が「蘆城の駅家」跡と推定されている。

③ 「駅家」とは古代、中央政府と地方の連絡のために諸官道に原則30里（約16km）毎に置かれた駅のことである。馬が置かれ、官使の往来に当って次の駅まで送り、宿泊や給食に奉仕するのが主な仕事であった。

④ 「蘆城の駅家」跡と見られる建物跡が発掘された筑紫野市大字吉木の位置する地域は福岡県の中央部からやや西部に位置しており、古代、東部に向かい豊前（現福岡県東南部及び大分県北部に属する。）を通過して瀬戸内海沿岸に至る古代の官道「田河道」たがわじに臨んでいることから万葉集に詠われた「蘆城の駅家」があつたと推定されている。

⑤ また、この駅家のあつた推定地は大宰府政庁跡から近く、周辺は山々に囲まれ平野部を蘆城川（現・宝満川）が流れる景勝の地であるため、この万葉集にある旅人の送別の宴の他、しばしば大宰府官人達の憩いの場、或いは送別の場として宴が開かれたことが万葉集に数首詠われている。

（参考文献）新潮日本古典集成「萬葉集」・榊晃弘著「万葉のこころ」桜井満著「万葉集を知る事典」
他



《写生地》太宰帥・大伴旅人の送別の宴が開かれた蘆城の駅家跡推定地(福岡県筑紫野市大字吉木・水田地) 一帯を描く。(杏花)